慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	天正遣歐使節記の一本に就て
Sub Title	
Author	岡本, 良知(Okamoto, Yoshitomo)
Publisher	三田史学会
Publication year	1940
Jtitle	史学 Vol.18, No.4 (1940. 4) ,p.165(727)- 170(732)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19400400-0165

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

天正遣歐使節記の一本に就て

岡本良知

一

日本の對外史、殊に初期の基督教布教時代史の研究は最近の數年間に頗る進歩した。其の最大の理由は資料特に直接資料の續出に依るのである。天正遣歐使節の研究も此の例に漏れない。寧ろ此の使節紀行に關する限りクラッセやシャルルヴォアの如き間接の編纂書に由つた時代は頗る短かつたのであらう。既に早く明治年間にイタリヤに殘つてゐる零細な文書類を採訪された村上博士は明治三十六年の史學雜誌に詳しく紹介文を載せられてゐることであり、又グァルチェリのイタリヤ文、ドテルテ・デ・サンデのラテン文の兩使節記の存在も知られてゐたのであるから、當時日本では之等の直接資料を用ひることが稀であつたといふよりも不可能に近かつたけれども、時代の進むに從つて之を將來し利用しやうと考へられるのは當然である。果して昭和年間に至つて孰れも夫れは實現して來た。グァルチェリ使節記は使節の歐洲退去直後に出版されたものであつて流布本も稀少ではないから、早く將來され、六年前に太田正雄博士の全譯が現れたことは周知の如くである。又サンデの書は耶蘇會の極東に於ける歐文印刷最初の出版書として澳門で出來たのであるが、現存する

部數が極めて少ないために容易に入手し難かつたけれども、之亦十年前寫眞復本も東洋文庫へ來り、次いで幸田成友博士が其の一本を入手された。從つて全譯は濱田耕作博士外數人の方の年來の苦心により、最近に世に出やうとしてゐる。更に村上博士の探訪された在イタリヤの多數の文書類も、其の後の發見の分と合せて其の大部分が轉寫されて、近く現れる大日本史料中に數多く收載されるといふことである。

以上の文書類や紀行全文を載せる書によつて使節一行の行程終始の細事まで大略知られるに至つたのである。殊にサンデの書は最も價値高く、使者自らの記錄の如く事の大小となく順序正しく殆んど餘すところなく記錄されてゐる。併し、使節に關するものは夫れだけで遺存なしといふことは勿論出來ないのである。之に關する書にしても、現今知られ著錄されてゐるもの以外に猶多くの佚

書があつたことは何人も想像するところであらう。エンゲルベルト・ケンプェルの時代卽ち使節訪歐の百年後でも、多數の關係書の歐洲に存してゐたことが、其の著書によつて察せられる。殊にグァルチェリと同時代に歐洲に於て使節を目擊して著したジャック・オーギュスト・デ・ツセーの書は優れてゐたといふことである。渡邊修次郎氏の「世界に於ける日本人」に、幕末の松井・京極使節が「ユトレクト」で一本を得て歸國した消息も傳へられてゐるに拘らず、其の存在も知られず、著錄せられてゐない。此のやうな佚書は決して少くはあるまい。我等は嘗て、佚書中には、最も貴重な使節直接關係者の記錄も加へらるべきだと推察してゐたのであるが、今日では、サンデの書が使節と深緣あるアレッサンドロ・ワリニャニの著と見做すべきものとせられ、又使節歸國の一二年後に編述されたルイス・フロイスの書も現れたので、

最早夫れを斷定し得るのみならず、更に使節中の日本人の紀行文さへあつたことを肯定出來るのである。夫れ故にここにフロイスの編年記中の使節記を簡略に說明しやう。

二

使節行の、動機より書き起して、長崎出發より歸着までの前後八年間の紀行錄としては、グァルチェリのリスボン出發まで、サンデの澳門到着までの記載に較べて最も完全であるが、其の點は別にしても、此の書は特に往復の航海記錄として前記二書よりも遙かに詳しく、歐洲旅行中の記事にしても、他に簡なるところが詳に錄される點も頗る多いのである。殊に、ポルトガルとエスパニヤ滯在中の記事に於て甚だしい。此のやうな詳細な且つ順序ある旅行記を使節と同行しなかつたフロイス自らがの記錄したのではなく、使節隨行者の諸記錄を以て編述したと斷定することは出來る。一五九〇年十月十二日附の書翰でフロイスが使節一行の歸着の狀景を詳報してゐるところを以て推察される如く、彼は使節の發着を長崎で送迎した人の一人であつたから、之に深い關係を有したのは疑ひない。されば此の書の首尾は彼自身の見聞を主にして著したのであらう。併し、旅中の事實は主として、終始使節と寢食を共にし、世話をして最も重要な役を務めたディオゴ・デ・メスキータの記錄に據つてゐるのである。此の書の文が、日記風であり、而かも他のフロイスの書翰や著書の文體とは幾分異つて、稍々拙劣であること、又書中に現れる人物の名の悉くを克明に錄するに拘らず、毎日缺くことなく最も頻繁に出場するメスキータを稱ぶに唯パードレといふ代名詞を以てすること等より夫れは推察し得るのであつて、フロイスは一人稱で書かれたのを三人稱に置き換へ前後

連絡あるものとしたのであらう。但しメスキータが長崎歸着後にどれ程フロイスの編述に援助を與へたかは想像の限りではない。其の上此の書には處々にメスキータ以外の一行中の人の記錄も加へられてゐる。フロイス自ら明瞭にことはつて引用してゐるところも少くはない。其のうちには殊に隨行の日本人コンスタチーノの覺え書きとか、名を記さぬ日本人の記錄とかが見えるから、其の種の文書も少くはなかつた筈である。但し、夫れ等の日本人の記錄として引かれるのは、フロイスが特に傳へるところでは多くはポルトガル語であつた。然し此の理由は日本語の記錄が作られなかつたといふ否定にはならない。

前にも述べた如く、斯のやうな隨行の日本人の記錄や、更に想像し得る限りでは四使節自身も書いたかも知れない日記類が、今日に殘つたならば更に詳しいことを知ることが出來、又日本人としての旅行の印象や心持ちをも窺へるに違ひない。メスキータの日記其のものと雖も他日發見される可能性は頗る少ないのであるから、況や本人の記錄の出現は殆んど絶望であらう。兎に角メスキータの日記の大略を其の儘傳へる此のフロイスの使節記にしても、最近一寫本が發見されたのは幸中の幸としなければならない。

既にフロイスの編年記に就て述べたときに、此の使節記にもいささか觸れた如く、此の書は、フロイスの一五九三年に著した日本教會史（アパラートス）備用上卷の卷頭百十四枚を占め、ツールーズのサルダ氏の所藏であり、十八世紀に於ける澳門耶蘇會の膽寫にかゝるのである。又其の發見紹介者がフランシスコ派のシリング師である。此の種の使節記を通じて記述の主力が歐洲諸君主諸都市の訪問記に置かれ、途中の航海記を閑却されるのであるが、フロイスも取捨力を其の點に多く用ひたから、此の

書も其の例に漏れないけれども、而かも其の簡單な航海記がサンデよりも詳にして、グァルチェリとは、全く比較し難いことは前に述べた如くである。といつてイタリヤ滯在中の記載や諸君主との往復文書の引用等でも前記二書より遜色があるわけでは決してない。今之をサンデの書に比較して見るに、大體に於て兩者の內容の主眼點が一致する。卽ち記載事實の順序が同じく、對稱物も小さな事に到るまで略々同じい。但しサンデに於ては他に見られぬやうな當代歐洲各國一般の社會・風俗等の說明に半ば近くの頁が費されてゐるから、量の上より見て兩書には甚だ隔りがある。併し兩書編述の目的は相異なるのであつて、一は啓蒙的意義をより多く帶び、他は報告的意義以外を有せぬのであるから、當然のこととして夫れは理解される。而して兩書の歐洲に於ける旅行記のみを對照すれば、餘りに一致することの多いのに喫驚する。同一の使節の紀行錄が何人の作に係つても、大略一致するのは當然ではあるが、然し此の兩書の符合は夫れよりも甚だしいのである。但し兩者に繁簡の相違があり、殊にサンデに簡にしてフロイスに詳なる點が少くない。然し是亦兩書の目的の相違によつても、編述者の相違によつても說明されるのである。玆に於て兩書の基本となつた記錄が大抵同一のものであつたと我等をして推察せしめる。換言すればサンデの書も使節の歐洲旅行記を主としてメスキータの記錄より採り、夫れに幾分の他の消息を併せて作られたと見做したいのである。今は此の推察を斷定とすることを避けておくが、時の經過はやがて夫れを確定的にすることであらうと思ふ。

又後世の編纂書を別にすれば、使節旅行の直後に書かれた使節記としては、現存書ではグァルチェリが一五八六年刊、サンデが一五九〇年刊、フロ

イスが一五九一年か九二年の作であるから年の上よりいへばフロイスの書が最も後く出來てゐる。年々の書翰、旅行關係文書、記錄及び前に世に出た諸使節記を參照した上に猶、當時フロイスの日本耶蘇會に於ける經驗と地位とより見れば、日本に於て夫れに關する直接間接の捨遺を集めることが出來た筈である。我等が此の書を讀んで屢々其のやうな點に思ひ當るのは、實に諸使節記中の最大の長所として指摘するに足るものであらう。

此の外に、此の使節記の內容によつて不確かなことが確められ、新事實が知られる事も少くはないが、夫れは第二次的研究に屬するものであるから、今茲には觸れない。